

都市デザイン <用語の解説>

第2回 都市デザインとは

(2) 成り立ちと系譜

出典・参考：「建築大辞典 第2版」、彰国社、1993

相田武文、土屋和男、「都市デザインの系譜」、鹿島出版会、1996

オースマン	Georges Eugene Haussman, 1809~1891 パリ生まれの行政官、都市計画家。ナポレオン3世の下でセーヌ県知事となり(1853~70)、パリ市の都市改造を大胆に実施した。橋梁の建設や大通り、広場の整備など、この計画は基本的に軍事上、交通上の要求に応えたものであるが、同時に、記念建造物の見通しの効果を強めるもので、それによって市の相貌が決定された。 <u>都市を技術的な問題として扱ったのは彼に始まる。</u>
オースマンの パリ改造計画	Haussman's projected transformation of Paris 1853年から1869年の間にパリで行われた都市計画。バロック都市計画の典型例として有名。計画の概略はナポレオン3世によって描かれていたが、オースマンの精力的な仕事と決断力がなければ何一つ実現しなかったであろうとされている。
P. ゲデス	Patrick Geddes (1854-1932) イギリスの社会生物学者。都市計画の先駆者の一人。自然科学者としての訓練を受けたが、生物学、地理学、社会学の視点から都市を有機体、それを含む地域をその生息地とみなした地域調査および研究を通して次第に都市計画に関与していった。彼の進化論的都市論は、その展示会がパリ等で開かれ、『CITIES IN EVOLUTION 進化する都市(1915)』として出版された。彼はこのなかで、正確な統計資料に基づく科学的な都市計画技術の必要性を説き、当時の官庁の都市計画に大きな影響を与えた。1914-24年にはインドやパレスチナで実際の都市計画に参画した。
ハワードの田園都市	garden city 大都市に工業の集積、人口の集中が進み、都市問題が顕在化した19世紀末に、E. ハワードが提案した計画都市概念(『明日の田園都市』, 1899)。都市生活と田園生活を共に享受できるよう、土地の私的所有の制限や都市の変化の計画的制御、都市規模の限定などの主張を持っていた。ハワードの主張は1898年に結成された田園都市協会に引き継がれ、国際的な運動に発展した。
近隣住区	neighbourhood unit 都市の計画単位の一。住宅地において、居住者の日常生活上の社会的な要求と物的な要求を充足させるために設けられる単位。学校、店舗、公園などのコミュニティ施設を備え、我が国では小学校を中心に8,000~10,000人が単位となる。1920年代C. A. ペリーが提唱したのが初めといわれ、G. フェーダーの研究および提案などによって裏付けられた。住宅地計画に重要な概念とされている。 近隣住区単位の特徴は以下のようなものである。(1)規模：小学校1戸を必要とする人口に対応し、その面積は人口密度によって変化する。(2)境界：住区は周囲を幹線道路で区切り、通過交通を排除する。(3)オープンスペース：小公園とレクリエーションスペースの体系を持つ。(4)公共施設用地：学校その他の用地は住区の中央部か公共用地の周囲に設ける。(5)店舗地区：住区に1カ所以上で、住区周辺、道路の交差点、隣接住区の店舗地区付近に設ける。(6)内部街路体系：住区内幹線道路を設け、通過交通を排除する。
ガルニエの工業都市計画	Garnier's industrial town 1901~04年にかけてT. ガルニエが設計した工業都市案。バロック的都市計画を克服した最初の都市計画といわれる。フランス南東部に想定されたこの工業都市は計画人口35,000、鉄道と川の間にとめられた工業地域と、公園によって保護された住居地域から成り、労働と生活の両面に対応した近代性を備えていた。ガルニエは1904年以降と計画案の推敲を続け、全体計画以外に、シティセンター、集会場、劇場、病院、学校、競技場、工場そして数種類の住居ブロックなどについてそれぞれ平面図と棟静を描いた膨大な設計を作成し、1917年『Une Cite Industrielle』として出版した。
コルビュジェの 300万人の現代都市	Plan de la ville de 3 millions d'habitants, Le Corbusier 1922年パリ博覧会でコルビュジェが発表した理想都市案。緑と太陽に満ちた都市という彼の理念と幾何学的パターンの愛着を反映した計画。都市全体が保護帯によって緑の中に維持される一方、人口密度と同時に空地率も周辺部から都心部へと高まっていくように計画されている。中心に交通センターがあり、都心部にはha当たり3000人を収容する60階建てのオフィスビルが群立しているが、建坪率は5%に押さえている。周囲には8階建ての住宅が広大な空地の中に配置(300人/ha, 建坪率15%)され、郊外部は独立住居からなる田園都市となっている。
ゴードン・カレン	Gordon Cullen イギリスの景観デザイナー。イラストレーター、博覧会デザイナーを経て、第二次大戦後アーキテクトチュラル・レビュー誌の副編集者となる。1956年以後はタウンスケープ・コンサルタントとして活躍している。カレンがアーキテクトチュラル・レビュー誌にタウンスケープ論を発表し始めたのは1947年のことだが、1961年には一連の論文が整理・補足され、TOWNSCAPEとして出版された。彼は、タウンスケープを定義して「一つの建物は建築だが、二つの建物はタウンスケープである」と述べ、フィジカルな環境も人々と同様に都市的な性格をもち、その場所に独自の生活を付与すべきことを示唆している。それは国土の破壊と都市の混乱をまえに困惑の度を深めていた人々の間に大きな反響を呼んだ。

- タウンスケープ派 イギリスのゴードン・カレンを代表とするグループ。彼らの仕事に一貫しているのは、それぞれの都市固有の空間を継承し、デザイン原理として抽出し、現代の集合体の設計に役立てようという態度である。これは、アメリカ・オレゴン大学で始まり我が国でも多数の建築家や大学研究室で行われた「デザインサーヴェイ」にも共通する視点である。すなわち、1) 伝統的町並みや小規模な集落など、ヴァナキュラーな建物群を対象とし、2) それまでの建築研究の平面中心主義、母屋主義を免れ、立面と平面を対等に扱い、母屋と付属屋を対等に扱い、建築物を敷地および道路との関係で捉えるところにある。
- ケヴィン・リンチ Kevin Linch (1918～84)
アメリカの都市計画家。1937～39年、タリアセンでF.L. ライトに師事する。1947年、マサチューセッツ工科大学で都市計画を専攻し学位取得。1948～78年同校にて敷地計画と都市計画の講座を受け持つ。都市空間を視覚的構造によって秩序づけようとする立場を採っており、G. ケペシュとの都市計画に関する共同研究のほか、『The Image of the City (1960)』、丹下健三・富田玲子訳：『都市のイメージ』、『Site Planning (1962)』、前野淳一郎・佐々木宏訳：『敷地計画の技法』などの著書がある。
- 都市のイメージ K. リンチが同名の著書において提示した概念。各都市には多くの人々が共通に抱くパブリックイメージが存在するとし、そのイメージの認知され易さ（イメージアビリティ）を高めることを都市デザインの目標の1つとして提案した。
リンチは、イメージがアイデンティティ、ストラクチャー、ミーニングの3成分から成るとし、環境のイメージを構成するものとして、パス（道路、鉄道、運河など人が移動に使う線の要素）、エッジ（海岸、開発の縁など面的広がり境界線）、ディストリクト（二次元的広がりをもち、均質にイメージされる地域や地区）、ノード（交通路の交点や集合点）、ランドマーク（土地や場所の目印）の5要素を抽出した。
- イメージマップ image map
各自がイメージしている都市や建築の空間を地図化したもの。各人のイメージは各人ごとに実際とは異なるが、それらを集積することにより都市や建築の空間の特性を把握することができる。都市空間については、K. リンチがボストンのイメージ分析で初めて試みた。
- C. アレグザンダー Christopher Alexander (1936～)
ウィーンで生まれる。ケンブリッジ大学で建築と数学を学び、ハーバード大学で建築学の学位を取得(1963)。以来カリフォルニア大学バークレイ校で教鞭をとり、環境デザイン学部建築学科教授。1967年バークレイに環境構造センターを設立。著書は『コミュニティとプライバシー』(1963)、『パターン ランゲージ』(1979)など多数。プロジェクト、建築設計でも幅広く活動し、埼玉県に進学園東野高校では主任建築家として建設に参加した。
- パターンランゲージ pattern language
C. アレグザンダーが提唱した、具体的な建築や環境を合理的にデザインするためのツール。「パターン」と呼ばれる環境を構成する部分要素の集合を、「パターン・ランゲージ」という方法にあたるシステムで、セミラチス状に構成することによって環境や建築を生成する方法で、建築家の独善によらない、全員参加型の設計を目指している。
- R. ヴェンチャー Robert Venturi (1925～)
アメリカの代表的な現代建築家。プリンストン大学および同大学院を1950年に修了。1954年から2年間ローマのアメリカンアカデミーに留学。1964年からジョン・ローチと協働する。ペンシルベニア大学助教授(1957～65)、イェール大学教授(1966～70)等、多くの大学で教鞭をとる。近代建築に対する批判の書『Complexity and contradiction in Architecture (1966)』、伊藤公文訳：『建築の多様性と対立性』、『Learning from Las Vegas (1972)』、石井和紘・伊藤公文訳：『ラスベガス』は現代建築の展開に多大な影響を与えた。彼は都市の表層性を修辭学的に捉え、類型学(タイポロジー)を適用し、記号化する。そして、ラスベガスのサインを「コミュニケーションの建築」と評価した。代表作品に、母の家(1963、フィラデルフィア)、プリンストン大学ウー ホール(1983、プリンストン)などがある。
- コーリン・ロウ Colin Rowe (1920～)
建築／アーバニズムの理論家。永らくアメリカのコーネル大学で建築および都市計画の指導にあたった。1978年に共著で『コラージュ・シティ』を出版している。ロウは、近代建築に深い理解を寄せながらも伝統的都市との比較を行い、そのどちらも共存させる道を選ぼうとする。19世紀末頃より1920年代までに発表された近代建築による都市プロジェクトは、部分的に実現されたものの、いずれも満足いく結果ではなかった。少なくとも欧米については伝統的な都市の方が魅力的かもしれない。この二者択一に対して、古いものと新しいものとのずれが新たなイメージを生み出すとしている。
- 槇 文彦 建築家。東京大学建築学科卒業、ハーバード大学修士号取得後、ワシントン大学助手、ハーバード大学助教授を経て、1979-89年東京大学建築学科教授。(株)槇総合計画事務所代表取締役。代表作品は、代官山ヒルサイドテラス、スパイラルなど多数。我が国のなかでも最もアーバンデザインを意識する建築家の一人であり、都市に対する様々な言及を行ってきている。著書「見えがくれる都市」では、都市の奥性など、日本の都市が有する固有の美について説き、その空間性が反映されたのが代官山ヒルサイドテラスでもある。横浜の都市デザインでも、馬車道の計画設計などを先導してきた。
- バーナード・チュミ Bernard Tschumi (1944～)
現代の建築家。コロンビア大学教授。1983年、ラ・ヴィレット公園の国際設計狭義に提出した案が最優秀となり、全体計画をつくる主任建築家に選ばれた。ラ・ヴィレット地区の開発は、パリ市内北東部のと畜場の跡地を、50haの大規模な公園にし、併せて音楽センター、科学産業博物館などを建設する計画である。公園の設計競技は伝統的な造園技術としての提案ではなく、屋外劇場、レストラン、アート・ギャラリー、各種ワークショップ、ビデオ・センターなど、様々な機能を併せ持った、いわばひとつの都市の基盤整備であったと言える。しかも、それは一般的なインフラストラクチャーとしてのそれというよりも、目に見え、身体的に体験できる、視覚的または運動的な基盤整備であった。

チュミの案は、点線面の異なる系を重ね合わせることによって説明される。点としてはフォリーと呼ばれる赤く塗られた小規模な建物が敷地内に格子状に配される。線は曲がりくねり、高低差をもった、人が歩くためのプロムナードである。面は、円形、三角形、四角形で構成され、そこには既存の条件であった科学産業博物館や旧市場の建物等が含まれる。それぞれの系は分離されて、模式化されダイアグラムとして示される。そしてこれを一つの敷地の上に重ね合わせるが、一見無造作に置かれる。チュミは、その調整をあえて意図的に避けることによって、それぞれの系の計画の過程では予期できない異種の組み合わせの隣接や併存が起き、そこから生まれる新しいイメージを目指している。